

ふうとう
埠頭の風

杉本苑子



講談社

埠頭の風

杉本苑子

講談社

埠頭ふとうの風

定価 11200円 (本体 11650円)

著者 杉本苑子

一九八九年七月二十五日 第一刷発行

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二―二二一 郵便番号 112

電話 (03) 9451111 (大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© SONOKO SUGIMOTO 1989 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部までにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。

なお、この本についてのお問い合わせは、

文芸図書第二出版部までお願いいたします。

ISBN4-06-204480-3 (文二)

目次

千亀亭事始め

5

埠頭の風

49

螢のかんざし

77

ぶち割れ皿を

99

ひっぺがし物語

137

逢魔の辻——相州露木騒動——

185

装幀／安彦勝博
装画／五雲亭貞秀

『墨利堅国大船之図』より
(神奈川県立博物館所蔵)

埠頭ふとうの風

千亀亭事始め

江戸が東京と変ろうが銀座通りにガス灯がつこうが、からッ風ばかりは同じですよねえ。びゅうびゅう吹きまくっていましたっけ。あの晩も……。

明治三十二年が、あと五、六日で終ろうって年の暮れでしたよ。

「うう、寒い寒い。なんて風だろうねえ。これで一つ、ジャンとでも鳴ってごらん。大焼け疑いなしだよ」

そのくせ寒くなんか一向になさそうな威勢のいいガラガラ声を先立ててね、

「いるかい？ 千亀姐さん」

扇芳亭の女将がやって来たんです。

あのころ、あたしや喜乃志って髪結床の二階に間借りしてました。

さしずめ鬼の霍乱かくらんでやつでしようね、ついぞ病氣になんぞかかったアなかったのに、風邪を引いちまってね、六畳間いっぱいに布団を敷きちらかして、金時の火事見舞いって見得みえでフリー唸うなってた枕もとへ、女将さん、どっかり坐りこんだってわけなんです。

「熱があるのかい？」

「だるいのよう」

「へん、そんな風邪ぐらい、わたしの話を聞きゃアどっかへすっ飛んで行っちゃまわあ」

と、いつもながら鼻息が荒い。

「ごたいそうな前置きだわねえ、何の話よ、いったい……」

「耳の穴、かっぱじってよくお聞きよ千亀さん、烏森からすもりのきれいどころを十二、三人撰えりすぐって、花の都はパリーの万国博覧会に出かけようって寸法さ」

「なんですってえ？」

思わず、床の上に起きあがっちゃいましたね、あたしゃア……。この扇芳亭の女将って人は、時々とっぴょうしもないことを言い出して、聞き手の目のくり玉でんぐり返させる婆さんなんです。

え？ 年？ 五十ちつと過ぎじゃなかったかしらねえ、あのころ……。ええ、ええ、婆アですとも。甲羅こうらに昔こがのはえた大婆アですよ色町で五十と言やア……。あたしなんぞも二十七だったか、もう立派に大姐さん株。婆ア芸者の仲間でしたからね。

「パリーってえと、どこの都だっけ？」

「エゲレスじゃなかったかね？」

「エゲレスてえは英国のこつてしよ。英国じゃなかったみたいよ」

「じゃオロシャかね。清国しんこくでないことだけはたしかなようだ」

と、たよりないこと！ 場所もはっきりしないくせに洋行がすさまじい。

「つまり見物に行こうってんですか？」

「ばかだねえ、見物されに行くんだよ。博覧会の余興に出て、踊りを見せてくれないかって相談が持ちこまれてきたんだよ」

「へえ、どこから？」

「パノラマ会社ってところからさ。千亀ちゃん、ビゴーさんて毛唐人けとうじん、知ってるだろ」
「知ってる知ってる。日本語をペラペラしゃべるラシャ屋でしよ」

「なんでももう、十七年も日本に住んでるそうだね。お内儀さんも日本の女をもらってるって話だけど、あのビゴーさんの橋渡しで、一丁出かけてみないかってことになったんだよ」

こまかいことは忘れちゃいましたが、そのとき扇芳亭の女将が口にした一人当りの報酬は、なかなかのものだったし、往復の船賃はむろんのこと、宿賃から諸雑費すべて会社持ち……。ついでにバリー見物もしてこれるといふ耳寄りな話でね、

「いいじゃないのさあ、行こうよ行こうよ」

根がおっちょこちょいのあたし、たちまち乗り気になっちゃった。

「そうこなくちゃいけないよ千亀ちゃん。じつはあんたのほかに、小当りに当たってあるんだ。お糸さんね、それから若太郎に寿美竜に、すみ子に喜撰」

「ふーん、みんな寿美屋の抱えじゃないの」

「ビゴーさんが寿美屋の旦那にまず、口を掛けてきて、旦那からわたしとこに相談が持ちこまれたってわけだからね、芸者は寿美屋に限ってくれて条件なんだよ」

あたしも寿美屋に籍を置かしてもらってました。烏森きつての置屋です。ついでにいうと、扇芳亭は料亭でね、女将さんもとは小芳って名で、寿美屋から左袂取って出ていたって間柄なんです。

「女将さんも同道するんでしょ？」

「わたしが行かずに、だれが采配振るってんだよ」

「女ばかり？」

「いいや、うちの板前の新さんをつれてゆく。それから箱屋の卯之吉。ビゴーさんもさ」

「あら、新さんが一緒なの」

言ったとたんに、あたしや床の上にどたんといっくり返った。かいまきを頭から引つかぶっち

まったんです。

「どうしたい、千亀ちゃん」

「ごめんね、少し寒けがするのよ」

嘘ですよ。顔に血がのぼるのを見られなくなかった。もっとも熱で、頬べたは赤いし、外からじゃ胸の動悸もわかりやしない。新さんにほの字にれの字だなんてこと、でも、だれにも勘づかれなくなかったんです。

「いいともさ。横になったまま聞いとくれ。なにせ水が変るだろ、食べものだってお前、パンだの肉だの……」

「牛ならけっこうよ。あたし、牛井大好きなもの」

「今どきの若い者は、芸者でさえそれだ。何だいありやア、開化井ってのかい？ 葱とごちゃ混ぜに牛を甘っ辛く煮つけて玉子を割り込んで井飯の上に汁ごとぶっかけてさ、まるで犬の食い残しだが、うちの連中なんぞも何かってえと開化井か牛鍋だ」

「うまいもの」

「うまいって朝ひる晩けものの肉ばかりじゃ身がもたないよ。それに、バターでやつ、牛の脂だろ、メリキッてのは乳だそうだが臭いやねえ。あんなもんばかり食べさせられたんじゃ勤まらないとごねたらね、米でも味噌でも沢庵でも鰹節でも、積み込んでってかまわないと会社じや言ってるんだとき。日本風の食事をしていいとなりや料理人がいる。新之助をつれて行こうってことになったわけだよ」

なんだか気持がふわとしちまった。新さんとバリーへゆく。ほんとかね。夢じゃないかしらん。眉に唾つけてみましたよ、あたし……。

この日はそれくらいで扇芳亭の女将は帰っていったけど、現金なもんよねえ、その言葉通り風邪なんぞどこかへ吹っ飛んじまった。さっさとあくる朝は起き出して湯屋へ行き、さっぱり身じまいして昼のちゃぶ台に坐りましたよ。賄附きの間借りなんです。

あたしに間を貸してる髪結いの喜乃志は、お和歌さんって腕っこきが、通いの梳き手を二人使ってやってる店でね、えらい繁盛ぶりでした。ちよいと類がないほどうまいんだもの。はやるのは当り前……。日本髪ぐらい結い手の上手下手がはつきり出るものはないんですよ。そりゃめいめいの髪はの生え形なり、毛のよしあしにも依るけれど、うまい髪結いにかかると女つぷりがぐんと上る。ほんのわずかな鬢びんの張り具合、たぼの出し方で、別人みたいになるんだから怖い。しかもお和歌さんに結ってもらうと銀杏返いもようしだらうとつぶしだらうと、根がきゅっと締まってそのくせ吊れたりなんぞしない。踊ろうが跳ねようがゆるむ心配もないってんだから、烏森じゅうの芸者が押しかける。

おっ母さんと二人っきりの小てい、いな世帯だし、かくべつ着る物に綺羅きらを飾るわけでもない。せいぜいが夜、刺身の皿に晩酌を一本、そのあと近所の寄席へ出かけるぐらいだから貯まっていたでしょうよ金が……。

独り者でね、無口な、実態じつたいな人でした。取っつきはよくないけど頼り甲斐のある、芯のあたたかなたちでね、何よりはお喋りでないところがみんなに信用されてました。髪結い床なんてのは噂の溜まり場で、耳に入るかげ口、譏り口そじのたぐいを右から左へ吹聴ふいちょうされたんじゃたまらない。その点、お和歌さんところなら安心して客同士べちゃくちやできる。何を聞いてもふんふん、うなずくだけで、金仏かなぶつさまみたいに黙ってましたからね。

昼は飲みません。それでも骨休めの時間を一時間にとって、ゆっくり食べる。おっ母さんて人

もきれいい好きな、働きの婆さんだったが、稼ぎのいい娘に一目も二目も置いててね、つれあいに仕えるようにお和歌さんを立てていましたよ。

ぶりぶり身の緊ったひと塩の鱈……。旬だから焼くとほんのり脂が乗って、うまいやね。厚切りのその皿に、しらす干しを摘み入れたところ昆布のおつゆ、甘く、照りよく煮上げた慈姑の鉢、磯の香りがブンブンする海苔の佃煮を添えて三人で箸を取る。ありきたりの惣菜だが、お母さんの気配りが京菜の漬け物ひとつにもゆき届いて、そりゃァおいしい。ばくついている顔をじっと見て、

「千亀さん、万国博覧会へ出かけるんだってね」

焙じ茶をすすりながらお和歌さんが言います。

「評判でしょ、もう界限で……」

「フランスのパリーといやァとてつもない遠国だ。身体にだけはお気をつけなさいよ」

「へええ、パリーってのは、フランスにあるの？」

穴のあくほど、さらにあたしの顔をじっと見て、持ち前の低い、静かな口調で、

「のんきだねえ、あんたって人も……」

お和歌さん、言いましたよ。はは、ちがいない。あたしもね、我れながらのんきだっと思ったものねえ、そんなとき……。

2

正月は花柳界の稼ぎどき……。芸者も大忙しです。新調の衣裳で、だれもがり、ゅうと改まる。

来るお客、来るお客に扇芳亭の女将が、洋行の一件を吹き立てたから、

「大和なでしこの心意気。国粹の美を海外に宣揚！」

なーんてね、新聞種にまでなる騒ぎでした。

烏森はご承知のように、一流どころより格が落ちる。負けるもんかって気がだれにもあるんです。ことに扇芳亭の女将は親の仇みために、柳橋だ霞町だと聞くと躍起になる人でね、そもそも今度のバリー行きも、そのへんの意地の張り合いから始まった計画だったようです。

慶応三年ってえと、ご一新の前ですよ。まだ徳川さまが瓦解なさらなかったころの話だが、やっぱりバリーで万国博覧会があったそうじゃありませんか。世界中から見物人がやって来て、大にぎわい……。それをまた目当に芸人もわんさと集まった。日本からは独楽回しの松井源水一座、足芸の浜錠定吉一座、曲芸の隅田川松五郎なんて人まで行ったとか聞いたけど、そんな連中にまじって柳橋のきれいどころが三人出かけた。

松葉屋抱えのおすみ、お里、おかねって芸者だったそうですよ。まあ、この妓たちが、海を渡った芸者の皮切りじゃありませんかね。なにをやったかってえと、茶汲み女なんです、これが……。

日本茶屋ってんですか。会場の中におっ建てた檜づくりのお茶屋——。石灯笼なんぞ庭に置いて、床几には緋毛氈を敷いて毛唐人を休ませる。桃割れに友禅ちりめん、愛嬌たっぷりな美人連が茶を運び、朱塗りの小盃にみりん酒をチョビと注いで飲ませるって趣向ですから、青い眼のお客はよろこんだでしょうねえ。

でもこれが、扇芳亭の女将には業腹でたまらない。

「なんだい、茶釜と床几の間を行ったり来たり、ただ茶碗を運ぶだけなら人形にだってできら

ア。みんな知ってるかい？ 菊五郎が一世一代のあと猿若町で開店した菊寿堂って餅菓子屋には、ぜんまい仕掛けのカラクリ人形が置いてあってね、菓子を買いに来た客に茶を持って出る。金を受け取る。釣り銭まで渡してペコリとお辞儀をしたそうだよ。菊五郎は菓子を包むだけで、あとはふところ手してりゃよかったんだ。柳橋の妓どもなんざ、さしずめこの茶運び人形さ」悪口たらたら……三十年も四十年も前の話に、なにも今さら目くじら立てるこたアあるまいに、

「そこへゆくとわたしたちの洋行は、がらりと違うよ。芸者の本分を生かして踊りや唄、三味線——つまりまじりッ気なしに芸を見せに行くんだからね、みんなもそのつもりで、お国の恥にならないよう踏んばっておくれよ」

いやはや天を衝く意気込みです。

七草すぎると、にわか仕度がいそがしくなった。

多介だの蝶々だの勝太だの、顔ぶれは増しましたが、どれも芸達者、しかも評判の美形揃いです。かく申すあたしだって、自慢じゃないけど烏森十美人の一人でしたよ。本名のお亀が、いっそぐわない。おかめヒョットコと、対で呼ばれる面相じゃないぐらい、あんただって、げんにその目で見りゃわかるでしょ？

十六だ七だなんて若い妓にくらべりゃあ、そりゃ臺は立ってたけど、まだ何てったってあのころは若かった。三十前でしたもののね。とつくに死んじまったが、あたしの父親って人がそっかしい男でね、女の子が生まれたってんで有頂天になって、お亀って名を附けたんだそうです。

「鶴は千年亀は万年。おめでたえ名だ、長生きする名だってそればかり考えて、つい、うっかり、おかめヒョットコのほうを忘れちゃったんだよ」